



きょうは学級懇談会です。ジャンケン先生からのお話です。

まずは、このコラムを読んでいる先生方へ

国語を嫌いという子は少ない。だが、漢字、作文は嫌いという子は多い。書く技能…「時の順序にしたがって」「接続詞を使う」「事実と意見をわけて書く」等々。でも、「作文って楽しい」「書きたくなる」が最優先。そのために、この「魔法」を活用ください。

作文指導の、私の主舞台は日記でした。日記という毎日の、日常的な書く作業の中で指導してきました。日記というと、書く内容に着眼する先生は多いです。古くは「綴り方教育」…書くを通して生活を見つめるという日本教育の伝統的な成果だと思えます。

私は、ちょっと違って、書く楽しさ、書き方の「書く方法」に重心をかけていました。

例えば、「3行以上書いてはいけない」「朝起きてから3分間のことを書きなさい」

「『ただいま』から3分間の出来事を書いてきなさい」「給食時間の音と声で書いてみなさい」等々です。要は、「楽しく書く」作業を日常化していくことです。

学級に言語環境が整っているかです。例えば、図工で運動場や自分の顔を描く。その時、題名も工夫させる。「運動場」「自分の顔」を禁句にして、題名を考えさせる。そういう日常の中で言葉・文字、文への豊かな感性を求めていく。

保護者の方々へ

学生のレポートや論述式答案を評価していると、上手に書けているなあと思うのは、100人のうち5人くらいです。その5人に声掛けしてみると、共通点があります。それは本好きということです。作文・論文・レポート…そのレベルは、過去の読書量が決定する…これは私の経験的、実感的法則。

読み聞かせです。その時期を過ぎてしまった子どもには、家族が読書している姿を見せ、本を話題にしていく…とまあ、こうなるのですが、忙しくてそんな暇ないですね。でも、たまにはテレビを見ず、「読書する姿」そういうカッコいい姿を子どもたちに見せるのもいいかも…です。

「話す、聞く」はコミュニケーション能力、「読む、書く」は全体的能力の基礎…と、私は捉えています。「読む、書く」を通し、「見えるものを多様に見る」「見えないものを豊かに見ていく」、それは思考力の土台と、私は思います。みんな同じものを見ているのに、文にすると全く違う世界が広がる…書くという営みの魅力です。